

フランチェスコ・プリマティッチョ《オデュッセウスとペネロペイア》

における古代美術の参照 ―人物像のポーズと身ぶりをめぐって―

町野 陽輝（東京藝術大学）

オハイオ州トリード美術館所蔵の《オデュッセウスとペネロペイア》は、第一次フロンターヌブロー派を代表する美術家フランチェスコ・プリマティッチョ（1503-1570）がフランス時代に描いた油彩画の希少な現存作例のひとつとして重要である。その構図は、フロンターヌブロー宮殿の失われた「オデュッセウスのギャラリー」の壁画の一場面から直接引用されており、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』第 23 歌を文学的典拠とする夫婦の会話の情景が描かれている。

寝台に腰かける夫婦をクローズアップで捉えた本作では、本来の壁画から人物の身ぶりがわずかに変更されており、その解釈が作品研究上の注目点となってきた。わけても、オデュッセウスが王妃ペネロペイアのあごに触れる身ぶりは研究者たちの関心を集め、王妃への愛情（Béguin 1986 et al.）、その知略と美に対する驚きと敬意（Fiorenza 2006）、あるいは近年では愛欲を示唆するしぐさ（Deloince-Louette, Vermorel 2021）と指摘されている。他方で、造形的な面では主として色彩表現に古代趣味が指摘されてきたが（Frankfurter 1965；Johnson 1966）、プリマティッチョが古代遺物の収集と模写、型取りを任務としてフランスからローマへたびたび派遣されていた事実にもかかわらず、具体的な古代作品との関連性についてはほとんど検討がなされていない。

そこで本発表では、プリマティッチョが参照したと考えられる古代作品をいくつか具体的に指摘し、それらの図像との比較から本作における人物のポーズと身ぶりについて再考する。発表者はまず、本作のオデュッセウスのポーズの視覚的着想源としてカンピドーリオ広場に置かれる古代の河神像を指摘することで、ローマでの古美術調査と本作との連関をあきらかにする。そのうえで、画家が同地で実見した可能性が高い古代遺物として、今日マントヴァのドゥカーレ宮殿に所蔵されるアドニスの石棺を新たに示し、その浮彫りにおいて、あごに手を触れる身ぶりが憐憫の意味で用いられていることに注目したい。そこでは、アドニスのあごに触れるウェヌスのしぐさは、恋人への愛とともにその不運に対する悲哀の心情をあらわしている。プリマティッチョの油彩画ではこれとよく似た身ぶりがオデュッセウスに適用され、他方でペネロペイアの両手のしぐさは古来、語りの身ぶりとして受け継がれていたことが跡づけられる。

これらの身体言語を、夫婦が長年にわたる苦難の日々を伝えあうという主題内容とともに読みとくならば、本作はそれまでの艱難を語るペネロペイアと、愛する妻の言葉に憐憫の情を抱くオデュッセウスを描いた場面だと解釈しうるだろう。本作では、夫婦の深い共感と愛の交流という主題の本質が、古代に淵源をもつ身ぶり描写によって表現されているのである。